



デートレッスン
は若叔母と
年上お姉様と後輩に挟まれて

巨道空二
挿絵／サブロー

立ち読み版



Contents

目次

序章	悠香様襲来……………	4
第一章	悠香の唇……………	14
第二章	悠香と公園で……………	53
第三章	あかりとプールで……………	100
第四章	あかりと悠香と……………	151
第五章	最後の取材……………	222
終章	デートの計画は三人で……………	284

登場人物

Characters

紀尾直人

(きお なおと)

海の傍に住む大学生。父の出張に母がついていってしまったため、現在一軒家に一人暮らし。叔母である悠香には頭があがらない。

櫛田悠香

(くしだ ゆうか)

直人の母の妹で雑誌記者。小さい頃から直人を可愛がってきたお姉さんのような存在で、何かと彼を翻弄してゆく。

佐久間あかり

(さくま あかり)

直人にとって友人以上彼女未満の大学の後輩。お互いに好意を持ち合っているものの、照れもありまだ付き合うには至っていない。

「それじゃあ、脱がすよ」

白く浮かび上がる太腿の付け根がもどかしそうにすりあわされる。ホットパンツのファスナーのチリチリというかすかな音がやけに大きく聞こえ、内圧に耐えきれぬように開いていく布地と布地の隙間から薄いブルーの下着が明らかになっていく。

彼女の下半身を守る小さなジーンズ地の布切れに手を添えると、悠香が腰を浮かせてくれる。それだけではつきりとわかるよく鍛えられた太腿の筋肉が明らかになり、内腿に浮かび上がる青い血管が生々しい。

生唾を飲み込みながら、ホットパンツを下ろしていく青年はいつの間にか呼吸が荒くなっていくことに気付いた。もともと下着同然の格好だった悠香の衣服を脱がすことにこれほど興奮するとは自分でも驚きだった。

「悠香さん、綺麗だよ」

「うふふ。褒め言葉は嬉しいけど、どこが綺麗なのか教えて。もっと磨くから」

やはりまだまだ悠香は余裕があるようだ。かすかな焦りを感じながら大学生は女の足からホットパンツを脱がすことに成功した。

「おっぱいの形もいいし、腰や足のひきしまったところがすごくいい」

「ありがとう。ナオ、好きよ」

彼女の下半身に残るのは、薄くて小さな布切れ一つになっていた。白い糸でふちどりされたシンプルなデザインのショーツは何層かの布地で構成されていてながらも薄く、その下の繊毛を黒く透かしているのがいやらしい。

うっすらと黒く透ける繊毛のあたりは大人の女性らしくふつくらと盛り上がり、恥丘という言葉を実感させる。そこに指を触れると繊毛の柔らかな感触がかすかに指を押し返してきて、ほかの場所とは弾力が違うのがわかった。

「んん……エッチね」

最後の一枚、薄い布地の上から悠香の敏感な部分をなぞると彼女の声が震え、その部分がかすかに緊張する。そこはすぐく柔らかくて、指を沈めるとどこまでも受け入れてくれそうだった。

上半身はキャミソールをずり上げて乳房を露わにし、下半身はショーツ一枚のみとなったまま甥っ子に委ねている悠香は、不思議なほどに満足そうだった。

「そんなにされたら、ショーツが濡れちゃうわ。早く脱がしてね」

「このままいじっていたら、だめ？」

「だめじゃないけど、恥ずかしいわ。ナオはそういうのが趣味かしら」

くにくくと敏感な部分を布ごしに刺激された叔母は吐息を震わせながら身体をよじ

った。それだけでむき出しになった乳房が大きく揺れ、頭に血がのぼった青年の理性を吹き飛ばしてしまいそうだった。

薄くて弾力のある布地に指をかけ、ずり下ろしていくのは生まれて初めての経験だ。女性の下半身を守る柔らかな草むらの黒さが最初に明らかになり、その草むらの中に三角屋根が覗け、秘裂につながっていくのがよくわかる。

「くすっ。ナオの目がすぐくエッチになってる」

「悠香さんの身体がエッチすぎるからだよ」

腰を浮かせた女体から、さらに布地を滑らせながら太腿の滑らかな肌を追っていくと布地がかすかに光った。一筋、細く糸を引いている。

「すごい……悠香さんのここ、糸を引いてる」

「ナオが濡らしたのよ。私、もう濡れちゃってるもの」

恥ずかしいと言いつつも悪びれない悠香の声は甘く湿っていて、柔らかな声音が耳の奥をくすぐってくる。叔母の誘惑はあまりに甘美だった。

「どうしたの？ ナオがしたいようにしていいのよ」

ソファに身体を沈めたまま、悠香が自分の胸を抱きしめるようにしてそのふくらみを強調する。片膝を立てている姿勢がひどく官能を刺激する。

「悠香さんのを、見たいな」

「もちろん、いいわ。ちょっと恥ずかしいけど」

甘える子供をあやすような優しい声。直人が片膝を立てた足に手を触れると、そのまま逆らわずに開かれていく。女性の神秘の部分が、太腿の間の暗がりに確かに露わになっていった。そこに顔を近づけていくと、女性の体臭の甘い香りとは違う、もっと生々しい香りが鼻腔を刺激し、股間に息づく男性の象徴がびくんと痙攣した。

「悠香さんのここ、すごくいやらしい匂いがする」

「そうよ。ナオが濡らしたんだもの。いやらしくなっているの」

もう一方の足も青年に逆らいはしなかった。ソファの上で美女は両足を広げ甥の頭をその間に迎え入れていた。

「すごいな……すごく興奮する。悠香さんはこんなところまで綺麗なんだ」

大陰唇のふくらみ。花びらの色づきは薄く、ピンク色を強く残している。花弁の形の乱れも小さく、しっとりとした蜜を含んでいるのがいやらしくも美しい。インターネットの画像サイトなどで見た無修正画像などに比べるとまるで別物だと思った。

「いじつていいわ。舐めてもいいのよ。そこはナオのものだもの」

ささやくような声は甘く、熱がこもっていた。血のつながる甥を誘惑する叔母。わ

ずかに五歳しか離れていない二人の視線がからみあい、青年は無言で頷いた。

「ああんっ。そこは敏感だから、優しく……っ」

片手で太腿の滑らかな肌を押さえながら、もう片方の手で大陰唇に触れ、大きくくつろげていく。柔らかな肉に引つ張られて花びらが開き、かすかな水音が響いた。

「す、すごいよ、悠香さん……」

明るい光の中で、悠香の豪華な肢体が直人の前でその全てをさらけ出していた。女としてもっとも秘すべき生殖器官を甥の視線にさらしたまま、花弁は内にたまった蜜をジクジクと滲み出させている。

「なによ。ナオったら、見ているだけなの？ 私だつて恥ずかしいのに」

意外なほどに形の整っている悠香の秘部に顔を近づけていくと牝の香りが強くなる。思わず興奮が高まってしまい、こらえきれずに唇で触れていく。

「んんっ……いいのよ。そのままナオの好きなように……あうんっ」

花びらを唇でつまみ、舌で甘美な花蜜をすくいとるようにしてすする。それだけで美貌の若叔母は喘ぎ、伸びやかな肢体を快感に震わせる。

二枚の花弁は頼りないほどに柔らかく、先ほどまでぴっちり閉じていたのが嘘のようにあっさりと直人の舌を受け入れていた。女性器の粘膜を味わいながら息を吹き



かけると、それだけでも震えが走った。

（柔らかい。女性器つて、こんなに柔らかいんだ）

それは深甚な感動だった。童貞の若者が空想し、妄想にふけた感触とは明らかに違う柔らかさ。陰唇という言葉に納得できるほどの柔らかさは、青年の口づけにそのまま溶けてしまいそうだった。

「あつ、ああん……ナオ、上手。そのまま、優しく……うんっ」

花卉をかきつけた先の秘裂に舌を差し込んでいくと悠香の反応はさらに激しくなつた。喘ぎ声は甘く、呻き声すら背筋をゾクゾクさせるほどに艶っぽい。愛しげに青年の頭を両手で撫でながら、女はその熟した肉体から果汁をしたたらせる。

「ひゃんっ……。そんなに匂いをかいじゃだめよっ……。ああっ」

ピンクと肉色の甘美な眺めを楽しみ、鼻面を女性器に押しあてながら。悠香の味と香りを存分に堪能する。性に目覚めたころから常に憧れてきた女性の味と香りは期待にたがわぬ心地よさで直人を興奮の渦に巻き込んでいた。

「はうっ……。あつ、そ、そこ……。そこいいの……。ひんっ……」

舌で奥地を掘り起こし、複雑な動きを示す肉壁を舐めさすると女の声は豊かな反応を示し、高く、時に低い喘ぎ声と身もだえが男の肉欲を樂しませる。ことに、花びら

の合わせ目目の肉粒は電気ショックにも似た反応を女体から引き出し、その激しさに直人が驚くほどだった。

「ああっ、あつ、そこ敏感だからあつ、ああっ、優しくっ……」

美女の情感あふれる反応に若者の股間は急角度にそそり立ち、ビクン、ビクンと脈打つほどで、股間に重しのような重量すら感じるほどだった。

「ね、ねえ。悠香さん。ぼく、もう我慢ができないよ」

「あん……せつかちね。ナオつたら……いいわ。お口でしてあげる」
びくんっ。

悠香の口から出たお口という言葉に反応して若いペニスが大きく震えた。すでに興奮が高まり硬度を高めていた男性器は痛いほどに勃起して、着衣の中に収まりきらないほど膨張していた。

「うふふっ。じつとしていて。今度は私が気持ちよくしてあげるから」

目の前に直人を立たせると、悠香のほっそりとした指がズボンのファスナーにかかり、滑らかな手つきで若者の前を開いていく。ズボンの圧迫から逃れた熱いペニスぐいぐいと下着を押し上げ、先端から滲み出る粘液が布地を濡らしていた。

「ううっ」

下着から顔を出したペニスは亀頭粘膜が張りつめてつやつやとして、激しい興奮状態を示している。竿部分は硬直状態と言っているほどに硬い。そこに優美な女性の指が触れるだけでも過敏な反応を示すのが恥ずかしいほどだった。

びくん、びくん、びくん——！

悠香の指が触れるだけでさらに急角度にそびえ立つだけではなく、指が巻きつけば痺痺とともに快感が走り、淫蜜を先端に滲ませる。これでは手でされるだけで出てしまいそうなくらいだ。

「敏感なのね。こんなに大きくなって感じているのね。可愛いわ。ナオのここ……」
滑らかな指が竿に巻きつくようにして握り締め、もう片方の手が亀頭を包み込むようにして愛撫する。先端に滲む淫液を柔らかな掌で塗り広げるだけでも腰が引けてしまいそうな快感だ。

「くうっ……き、気持ちいいよ、悠香さんっ」

「うふふっ。もっともっと気持ちよくしてあげるね」

丁寧に、優しく亀頭粘膜をこすられるだけで背筋がゾクゾクする。快感に身体を震わせる直人を嬉しそうに見上げる悠香がピチピチに張りつめた亀頭にキスをした。

「く、ううっ」

「覚えておいてね。これが私のオクチよ……ちゅっ」

小刻みなキスを繰り返されるだけで射精中枢がムズムズする。ヒクヒクと痙攣するペニスから大量のカウパー氏腺液が滲み出ていた。唇の柔らかさは凶悪なほどに気持ちよく、いてもたってもいられないようなせつない快感を呼び起こす。

「ううっ。そんなにされたら、すぐに出ちゃうよっ」

「そんなのダメよ。もつとガマンしないと気持ちよくないわよ……ほら」

その瞬間、思わず腰がひけてしまった。悠香の厚めの唇がぱっくりとペニスをくわえ込んだのだ。柔らかくボリウムのある唇に挟まれ、包まれる快感は想像をはるかに超えていた。竿を握られている直人のペニスはびくん、びくと小刻みな痙攣とともにカウパー氏腺液を吐き出し続けている。

「もっほ、ひもちよくひてあげゆ」

もつと気持ちよくしてあげるという悠香の言葉は嘘ではなかった。快感の上限というものが消えてしまったように快感は高まり、煮詰まっていくのだ。

ちゅぶ、くちゅくちゅっ、ちゅばっ——。

淫らな水音が、下半身から快感と共に耳を打つ。舌や唇が動くだけで快感が増幅され、竿と亀頭の両方がビクビクと震えてしまう。

あわてて手で自分の身体を隠そうとするあかりだったが、そのしぐさがさらに男の欲望を刺激するなどとは考えてもいなかっただろう。

「あら、隠したりしたらもったいないわ。ねえ、ナオ？」

「ぼ、ぼくに振らないですよ。あ、あかりちゃんはずごく綺麗だけどさ」

「綺麗なのはあかりちゃんだけなのね。私、悲しい……」

「ゆ、悠香さんだって綺麗だよ。って、何を言わせるんだよっ」

悠香がくすくす笑いながら直人の手を取り、あかりの手と結ばせる。目線が合ったのが妙に気恥ずかしく、二人で顔を逸らしてしまった。

「前にも言ったでしょ。女の子は褒めてあげなきゃだめよ」

「そ、それはそうかもしれないけど……あかりちゃん？」

胸もとに柔らかな感触が押しつけられる。あかりが抱きついてきたのだ。小さな、細い身体を腕の中に感じ、抱きとめるようにして彼女の全身を感じる。

「あの、名前だけで呼んでください。あかりって……」

「ああ、わかったよ、あかり……う、ゆ、悠香さん、後ろから……っ」

そう言った瞬間、今度は背中に柔らかく張りつめたふくらみを感じた。今度は悠香が背中に自分の胸を押し当ててきたのだ。

ふわっ——。

たっぷりとした量感ある乳肉が良質のクッション素材となって、二人の身体の間で柔らかくひしゃげるのが手にとるようにわかる。極上のバストが直人の背中にぴとりと押しつけられている。

「あのね。あかりちゃん。男の人もオンナの人も感じるころは一緒なの」

ぎゅっと直人の腕を後ろから押さえつけるようにしながらささやいてくる。その低めの声がひどく色っぽくて、全身の産毛が逆立ってしまいそうだ。

「だから、ナオも乳首や首筋は感じるのよ。ためしてみるといいわ」

「は、はい。やってみます……ちゅっ。ん、んんちゅっ、ちゅぷっ……」

素直に頷いた後輩が男の乳首に吸いついてくる。胸毛の薄い滑らかな肌にゾクリと悪寒にも似た不思議な感覚が芽生えた。

「お、おいつて……そ、そんなことしなくても……ううっ」

「うふふっ。乳首は男でも感じちゃうでしょ」

それは確かに快感だった。若者の未発達な小さな乳首が恋人の小さな唇に吸い出され、確かに勃起していた。硬くなった乳首があかりの口の中で吸われ、舌に転がされ、可愛らしい歯で甘噛みされる。その愛撫の一つ一つで、直人の身体にもどかしくもせ

つない快感が広がっていくのだった。

「くっ……あ、あかり。そんなにしなくてもいい……ううっ」

「うふふっ。直人さんが感じてくれて嬉しいです。ちゅっ、んっ、ちゅぷっ……」

男の乳首を可愛がるのが楽しいらしく、あかりの声は弾んでいた。すべやかな肌が密着しているだけでも気持ちいいのに、乳首を愛撫されるといふ快感はこらえにくかった。

「ナオったら、可愛い声あげちゃって。今度は私が後ろからしてあげるね」

「い、いや、そこまでしてくれなくても……う、ううっ」

乳房が背中を押し当てられている心地よい感触が上下左右に動く。すべすべして弾力のある双丘と、そのてっぺんの突起の感触が若い男の背中の人にこそすれ、泡立つような快感を引き起こしていた。泡立った快感ははじけ、全身に快美感を広げていく。

「ナオったら、あかりちゃんと私とで、サンドイッチね。ほら……」

うなじにキスをされると、首筋の毛が逆立った。唇が滑らかな肌をついばみ、優美な腕が二の腕を撫で上げてくる。前からはあかりの乳首責め、後ろからは悠香の愛撫とはさみうちになってしまった。

「ねえ、あかりちゃん。男の人のおちんちん、先っぽはすごく感じやすいの」

「は、はい、悠香さん……きゃっ、すごく……暴れんぼうです」

悠香の声に誘われるようにあかりの手が鋭角に立ち上がるペニスに触れた。感じやすい若い男性器はそれだけで跳ねるように動き、小柄な女の子を驚かせた。

「くすくすっ。先端は優しくね。竿の部分は強めにニギニギして、しごいてあげて」

「はい。先端は優しく、棒の部分は強く、ですね……こうですか、直人さん？」

彼女の小さな手がペニスにからみつく。時々思い出したように男の乳首に舌を這わせながら、柔らかな掌で敏感な亀頭粘膜を包み込み、細い指で竿を握り締めてくる。おずおずとためらいがちなしぐさがなんともしえない快感を生み出していた。

「こっ、こんな二人で……き、気持ちいいけど……ううっ」

「気持ちいいけど、なあに？ 言ってみたら、ナオ」

そういう間にも悠香のほっそりとした指が若者の脇腹を撫で上げる。それだけで、なんだか刷毛はけで撫でられたかのような異様な快感が広がる。自分でも思ってもいかなかった身体の敏感さには驚くばかりだった。

「ぼ、ぼくが二人を気持ちよくしてあげたいのに、できないから」

「あら、いいのよ。今は私たちがご奉仕してあげるんだから。ね、あかりちゃん？」

「は、はい。直人さんに気持ちよくなってもらいたいんです」

そう言ってもらえるのは嬉しいし、確かに気持ちいいのだが、やはり男としては女性に気持ちよくなってほしいと思う。前後から愛撫を受け続けでは男として寂しいものを感じてしまう。

「ナオにはまだ両手があるじゃない。あかりちゃんを可愛がってあげたら？」

「い、いいの？」

「断らなくてもいいわ。ナオにだって、あかりちゃんを可愛がる権利があるのよ」

あかりは無言だった。ほっそりとした身体を直人の胸の中に委ねたまま、彼の胸にキスをしたりの愛撫を続け、両手はペニスへの愛撫を続けている。そんな彼女の背中に優しく手を触れていく。

「ひゃんっ……あつ、あふうっ……あつ、ああつ」

まるで子供の肌のように滑らかなあかりの背中とはひどく感じやすい。彼女は全身が敏感な性質のようで、背中ももちろん例外ではなかった。彼女の柔らかくすべすべした肌を撫でるのはそれだけでも気持ちいいのだが、わずかな刺激にも敏感に反応してくる反応はあまりにも甘美だった。

「あつ、ああつ……な、直人さんっ……そんなにされるとっ」

細い身体をよじり、せつない声を上げるあかりの細い指がペニスに刺激を与え、直

人も同時に呻いてしまう。ロングの髪の毛をかきわけるようにして細いうなじを撫でてあげるとあかりの吐息が震え、途切れるのが可愛い。

「ああんっ……そ、そんなにされたら、あたし……」

直人の乳首に吸いついていた唇が可愛らしい喘ぎ声に占領され、手の動きも途切れ途切れになってしまっていた。そんな後輩の様子が愛おしくて、ペニスを彼女の手に委ねたまま細くすべやかな全身を撫でさするのがあまりにも気持ちよかった。

「うふふっ。二人ともとってもいい感じ。そろそろ先に進みましょうか」

たぶたぶと揺れる巨乳を押しつけながら、耳元でささやく低く甘い声にペニスは敏感に反応し、あかりの小さな手を驚かせる。

「オチンチンはね。女性のお口でされるのが好きなのよ。教えてあげるね」

ようやく背中から離れた女記者が女学生の頬に軽くキスをする。小さく悲鳴のような吐息を漏らしたあかりが直人の正面を悠香に譲った。

「一緒にやってみましょうか。あかりちゃん、経験ある？」

「あ、あの。なんだかちよつと怖くて……」

まだ男のペニスを握り締めているあかりの瞳が揺れるのを、悠香の二度目のキスが押し切ってしまう。

「大丈夫よ。私と一緒にナオを気持ちよくしてあげましょう」

「あ、はい……」

立ったままの直人の足元に二人が跪いている様子は壮観だった。対照的な美女が二人、ただ一人の男のために恭しくかきかしているのだから。こみ上げてくる征服感が股間の逸物を急角度にそそり立たせていた。

「さっきも言ったけど、先っぽはすぐく敏感だから優しくね。こんな風に」
ペロリと亀頭粘膜を舐められる感触に、ペニスがぐんと膨張率を増した。

「舌や唇で優しく、優しくね。菌を立てちゃだめよ」

左から悠香が、右からあかりがペニスに顔を近づけてくる。その瞳は潤い、ねつとりとして淫らな光を放っていた。頬が上気し、唇が半開きになっているのがひどくいやらしかった。

「うっ……ふ、二人同時になんて……くううっ」

ちゅっ……ちゅぽっ、ちゅるっ、ちゅぶっ——。

二つの唇が同時にペニスにキスをしてくる贅沢な感覚が竿から腰に痺れるような快感を広げていく。柔らかく、厚みのある悠香の唇の深みのある快感が。薄めで、小さなあかりの唇の柔らかさが。それぞれに違う快感が若者の快感中枢を揺さぶっていた。

「すごい……直人さんの、ヒクヒクしてます」

「気持ちいいみたいよ。もっと、もっとっておねだりしてみたい」

「お、おねだりなんか……うっ、き、気持ちいいけど……っ」

左右から直人の太腿に抱きつくようにして跪いている二人の乳房が押しつけられてくる感覚もたまらない。悠香の柔らかいくせに張りつめたボリュウム感あふれる乳房が。小さいながらも弾力たっぷりの、硬さを残した乳房が。左右から太腿に押し当てられ、背筋をゾクゾクさせる。

「口だけじゃなくて、ふ、二人の身体全部が……気持ちいいよっ」

腰にあたる二人の髪の毛の感触も官能を押し上げる。柔らかく細かいあかりの長い髪。ショートでよく手入れの行き届いたサラサラの悠香の髪。香りもまったく違う二人の髪が肌をくすぐってくる感触が快感に溶け崩れた脳を刺激する。

「くすっ。ナオったら、うっとりしちゃうて。あかりちゃん、吸ってあげて」

「は、はい。こ、こうですか……ちゅっ……」

悠香の口が竿のほうに移ったかと思うとあかりの唇が亀頭を押し包み、思いもよらぬバキューム感で吸いついてくる。柔らかな唇がカリを押さえ込み、ザラつく舌の快感が蛇のようにペニスにからみついてくる。

「くううつ……そ、それ、気持ちいいよ」

あかりの唇が開いたり閉じたりを繰り返しながら亀頭を刺激する。意外なほどに強烈な吸引が激しい快感となり、ペニスは限界まで膨張してはち切れそうだ。

「ふふっ。あかりちゃんのお口がいいのね。こっちはどうかしら」

叔母の指が若者の股間にぶら下がるうずらの卵大の二つの球体をとらえ、優しくもみほぐすようにマッサージを加える。それだけでもせつない快感が滲み出すのに、肉厚の唇が竿にキスを繰り返し、優美な長い指がしごいてくるのだ。たまらなかつた。抑えきれない呻きが口から漏れてしまう。

「うつ、う……くっ、ふ、ううつ」

まだ早い。そう思つて射精感を鎮めようとしても次々に襲いかかる性感に快感曲線は急カーブを描いて上昇していく。ペニスの先端からはカウパー氏腺液が滲み続け、ビクビクと小刻みな痙攣が快感をさらに高めていた。

「直人さんの……すぐく大きくなって、ヒクヒクしてる……」

「そうよ。もう射精直前ね。思い切り可愛がつてあげて」

二人の滑らかな掌が太腿をくすぐってくる。特に悠香の指が巧みに直人の尻や太腿を刺激してくる。直人のもっとも敏感な部分はあるに譲っても、一番感じさせるの



は自分だと言わんばかりだった。

「ちゅっ、ちゅぷっ、んんっ、んちゅっ……っ」

せめてもの反撃とばかりに二人の髪の毛を撫で、敏感なうなじを優しく刺激してやる。それは二人の身体に電流のような快感を生じさせるけれど、今の彼の快感の高まりには到底及ばないようだ。

ビクン、ビク、ビクン――。

ペニスが張りつめ、はじけそうなほどに膨張したまま痙攣する。今にも射精してしまいそうな快感の波の中、二人の美女がうっとりとした表情でペニスをいじり回し、丁寧にくすぐり、撫で、そしてしごいてくる。

「そ、そんなにされたら出ちゃうよっ」

鈴口を舌先がチロチロとくすぐってくる。誰に教えられたのかわからないがあかりの舌は縦横無尽に動きペニスの敏感な部分を次々に刺激してくるのだ。カリの裏を唇で刺激しながら、ペニスの裏の敏感な部分を舌でなぞられると腰が引けてしまいそうな快感が襲ってくる。腰の奥の熱い塊が今にもはじけそうさ。

「うっ、くくっ……ほ、本当に……このままじゃっ」

「いいのよ。出してあげて。あかりちゃんのお口に、ね」

無言のままあかりも頷いたようだった。あかりの可愛い、小さな口に欲望をぶちまける許可をもらった。ペニスが大きく痙攣した。

ビク、ビクビクッ、ビクン——。

「むぐっ、んんっ、ふみゅっ、んぐぐっ……っ」

亀頭を包み込むように深くくわえたままあかりが呻く。喘ぎ声すらも可愛らしい後輩の声が耳をくすぐり、直人の我慢は限界に達していた。

「で、出るよ……うわっ、うっ、くうううっ」

ドクンッ！ ドピュッ、ドピュドピュルッ、ドピュッビュルルッ——！

あかりの小さな口腔の中でペニスははじけた。続けざまの激しい痙攣とともに先端の鈴口から白濁した熱い粘液がはじけ出る。断続的な激しい快感とともにあかりの喉に欲望の液体を注ぎ込んでしまった。

「んんっ、んっ、んくっ、んくっ、んんっ——ッ」

あかりの苦しそうな呻きにも、今さら止められない。熱いスペルマが男性器官を通り抜け、口の中に迸る。なんとか飲み下そうとするあかりの喉に驚くほどの粘液が噴出していく。

こくっ、こくっ、こく——。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



Valkyrie

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>


KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!